介護相談員の声

「３Ｋの理想と現実」

「こんにちは、お変わりありませんか」と声をかけて、利用者様の笑顔と、それを見守る職員さんの微笑みに元気をもらい、そこから介護相談員の活動がはじまります。

介護相談員は、施設と利用者様やご家族の橋渡しの役目です。

そんな活動の中で、利用者様と職員さんとの関わり方で気がつくことがあります。

ある日、ユニットに向かう途中、拍手が聞こえてきました。

それは職員さんが、４月から異動になり、なじみの薄い利用者様に少しでも近づきたいという思いから、手品をしてコミュニケーションをとっておられたのです。いつもはあまり笑顔の見られない方が、楽しそうに職員さんの手を見ておられました。

お互いに信頼し合っている空間は、居心地の良い、温かい空気に包まれていました。

思わず一緒に大きな拍手を送りました。

介護職員からは「仕事内容の割に賃金が低い」、「人手が足りない」、「身体的負担が大きい」といった悩みが多く挙げられているとのことです。

巷間では、3K（きつい、汚い、給料が安い）の職業というイメージもあるようです。

しかし、一方で、やりがいを求めて介護職員になる人が多いという事実を見逃してはならないと思います。

高齢者虐待のニュースに心を痛めているのは、他ならぬ、施設で高齢者と関わっているこうした職員さん達ではないでしょうか。

介護サービスの提供者と受け手である前に、共に人権を持つ人間同士なのです。

「介護は人」と言われているように、何より介護者の介護に対する熱意と人間性が重要なのではないでしょうか。決して誰もができる仕事ではないのです。

以前、新聞で介護職の3Kとは＜きらめき、奇跡、感動＞と言っていた職員さんの言葉が印象に残っています。

輝いてケアにあたれば、きっと奇跡、感動に出会えると。

誇りを持ってケアすれば、理想の3Kが見つかるはずです。

私も将来、施設にお世話になることがあるかもしれません。

その時は、建物や設備を見る前に、職員さんや利用者様の笑顔が輝いているか、温かい空気が流れているかを、しっかり見据えて自分らしく尊厳をもって生活出来る場所を見つけたいと考えています。

そして今は、介護相談員として利用者様が居心地の良い空間が持てるように、また、職員さんが理想の3K に出会えるように、少しでもお手伝いができればと思っています。

京都市介護相談員　　牧野　祥子